

第3分科会

演題：こどもの育つ力とメディア

講師：尚綱大学短期大学部 名誉教授 濱崎 幸夫 氏

【講師紹介】

1946年熊本生まれ。熊本大学教育学部卒、米国モンタナ大学大学院留学。

尚綱大学短期大学部名誉教授、常民保育研究所主宰、日本冒険遊び場協会九州・沖縄地域委員、プレイパークネットワーク会議相談役。

伝統的子育てと今日の子育てを比較した調査研究を通して今日の子育てを捉えた、常民発達学を提唱。野生度調査の国際研究、野生力理論の構築。著書に「子育ての心理学」「縁側の子育て」（共にブレーン出版）。

【講演内容】

1時間と限られた中、子どもが成長する段階でメディアを使用する影響の怖さと、リスク、現代の子どもたちに欠けている野生力についてお話しいただきました。

キーワードは「子どもが持つ自ら育つ力・育ちあう力そして野生力をどう育てるか」です。概要は以下の通りです。

〈はじめに〉

本来子どもは自ら育つ力と育ちあう力を持っているが、残念ながらそれが実際にはできていない現状がある。人間は対人関係が大事なのは言うまでもないが、もっと根っこにある野生力、が相当重要な時代になってきていると思う。ワイルドレス・クライシス (wildless crisis) = 野生体験欠乏危機。

だから、自ら育つ力、育ちあう力、それと野生力をどう育てるためにはどうしたら良いか。

1 メディアの持つ影響力

*携帯電話やスマートフォン（以下携帯・スマホ）のアプリに子育てを任せる、という事例

事例1：赤ちゃんが泣いたときにアプリであやす。

音楽が鳴るアプリ ⇒ 効果あり だが・・・？

事例2：風呂に入らない、食事を食べない等のしつけとして。

鬼から電話、というアプリ ⇒ 効果ありだが最近の子どもは鬼では怖がらない、という事実。慣れてしまう、という恐ろしさ。

事例3：親の言うことを聞くようにさせる。

より強い刺激を求めて、撮った写真の顔が崩れてゾンビのようになるアプリ
⇒ゾンビが来たと思って驚いて言うことを聞く。

*電磁波の影響ではないか、と考えられる具体的な事例

・精子数の減少 ・癌リスクの増加

【資料】バイオイニシアティブ報告書2012年より

- ・保育園、幼稚園に行くと、赤ちゃん、子どもの身体が緊張で硬くなっていると感じる。4歳児は板の様。赤ちゃんは特に月曜日の緊張の度合いが激しい。マッサージをして解すとリラックスして（緊張が解けて）ふにゃふにゃになるが、携帯・スマホの電源を入れると、瞬時に緊張状態に戻ってしまう。
- ・メディアの怖さは慣れていくという現象面だけではなく、携帯電話の電磁放射線にある。
- ・原爆の放射線と同じ性質のものが携帯・スマホから出ている。どういう影響を及ぼすか、ということが資料からわかる。
- ・耳に携帯・スマホを当てている場合、電磁放射線は、大人は耳周辺を貫いているが、10歳の子どもの場合脳の芯まで貫いている。5歳の子どもの反対側の耳の方まで貫いている。ということは、4歳児、3歳児、2歳児、赤ちゃん、お腹の中にいる胎児の場合はどうだろうか？想像すれば、相当強い影響を与えていることは間違いない。
- ・10年、20年単位で長期間電磁放射線にさらされていると、重篤な影響が出る、身体にダイレクトに何らかの影響を及ぼすということが膨大な資料として出ている。一見微弱と思われるメディアから発せられる放射線の方が、（東京電力福島原子力発電所の事故による）福島の放射線量よりもはるかに怖い、と言う人もいる。事実として頭にまず、留めておいて欲しい。

2 野生力を育てる—4つの力と文明のゆくえ

(1) 昔と今の子どもの育ちの違い

昔：三角形の底辺に野生力

- ①野生力・・・自然との共生。土、虫と触れる、空の変化、風のおおいを感じる。

自然が何たるかを体験

- ②人間力・・・遊びという形で仲間とぶつかり合う中で育ってきた。

家庭：兄弟が多い 近隣：向こう三軒両隣 地域：異年齢の仲間・集団
共同体：村の子どもとして、共同風呂、若者組、宿親、婦人会、青年団

- ③思考力 考える力

体験の蓄積⇒体験の蓄積を抽象的なイメージに変換することで思考力は育つ。
体験した、実感した何かを言葉にし、伝えることで生きた言葉を身につける。
体験に根差した生きた言葉（生活語）を抽象的な言葉（社会語）に変換することで思考力が育つ。

- ④メディア力・・・ラジオや新聞（時代と共に変化）

今：底辺の野生力は小さくなり、頂点のメディアが大きく占めている。昔と逆になっている。

自然のものはあるが、体験できない。規制がかかっている。川、海 ダメ×

(2) 子ども観の問題—子ども観によって子どもの見え方が異なる？

- ・大人は目の前にいる子どもを見る、というより自分の中にある子どものイメージで子どもはこうあるべき、と決めつけて見ている。年配の人は自分が相当遊んでいるから、今の子どもも遊んでいると思い込んでいる。自分の中にある子ども像とのずれ。自然があっても遊べない、という状況があることを自覚していない。
- ・少子化で子どもひとりの周りに大人がいっぱいいて、監視の目になっている。

- ・自制力をあまりにも早くから求めすぎている。親の言うことを聞くのが良い子、としてはダメ。最終的には紳士、淑女たれ、ということは良いこと。しかし、プロセス、野生を大事にする時期とこのころがある。残念ながらずっとそれが体験できずに成長してきている。

3 どうすればよいか？

○子どもを多様に見る

子どもは状況に応じて自分の抑えられた部分を出す、ということを理解する。学校は地(本音)を出しにくい場所。育成クラブでは出せる場所。

○子どもの好奇心、探索心を大切に

子どもが歩けるようになったら、後をついて回り、何にチャレンジしようとしているか見守る。大人のまなざし。自分でやりたいことを選ばせる。体験させる。成長段階に応じたやるべきことを充分やらないと次の段階に行かない。

3歳くらい～自分のやりたいと思うことを思い切りやらせる時期＝自己発揮
 7歳くらい～少し自制して、コントロールする力、葛藤する
 9歳、10歳の壁(小学校3, 4年生)～節目。抽象的な思考ができるようになる

○遊びを通して体験させる

アドベンチャーパーク：基本的に一切禁止事項はない。

火、ナイフ、木登り、屋根のぼりすべてOK！

- ・本人が自分でやりたいことを決定し、自分がやりたい、と思う気持ちを大事にすることで達成感を得る。⇒子どもの生きる力、育ちあう力
- ・自分の責任で、判断で、考えてやる、という体験の機会を与える。

〈自立の話〉

自立とは？自分で立つ、自分の足で立つ、という発達。

仰向け→寝返り→這う→高這い→立つ

- ・体幹、足腰が充分に育つと体のバランスをとって自分で立てるようになる。
- ・順序良く身体運動の発達をたどると、自ら自分の身体をコントロールして立つことができるようになる。この時、自分で立つという意味での「自立」(身体発達)と、自ら立ったという自立感(精神発達)を同時に達成できる。(これがその後の発達の1つの核となる)
- ・自分は立てるんだ、と身体で覚える。
⇒相当深い意味 基本的な能動をきちんとたどることの大切さ
- ・倒れても手が出ない子ども・・・ハイハイで足腰や体幹を育てることが充分できていない

単立つとは？動物から人間になる一歩。

- ・自分で立てる、という青年期でいうアイデンティティの核ができる。
- ・自分で獲得したもの→人間の核

4 野生度調査について

30項目の質問に当てはまる項目に○をつけ、その数で野生度がわかる、というもの。

- ・今の若い人たちは森に入らなくなった。なぜなら～トイレがないから。→野生力が落ちている。
- ・震災の体験・・・野生力は災害時に相当活かすことができる。
水がない、トイレが流せない。

○の数	29個以上	野生度 100%	サルに付いて歩ける。
	25～28個	野生度 90%	野宿が可能。
	20～24個	野生度 70%	元気。内なる野生を大切に。
	15～19個	野生度 50%	一般的。ストレスが溜まりやすい。
	11～14個	野生度 20%	野生のパワーがなくなりつつある。野山で要充電。
	6～10個	野生度 10%	野生のパワーが危険ライン。すぐに野山で要充電。
	0～5個	野生度 5%	危険ラインを越えている。野生失調状態。

- ・野生度20%の人が学生に約7割
幼児期から学童期かけては野生力を培う重要な時期。できるだけ連れ出して遊ばせたい。
そういう時間がなく、機会がない、室内での遊びが関わっているのかもしれない。

〈まとめ〉

- ・メディアは極力遠ざけた方が良いということは明らか。
それ以上に、積極的に野生力を培う機会を家庭や学校の中で作り、活かす取り組みにあふれて欲しい。
- ・人類が今生き残っているのは、根底に育ちあう力があるから。我々が持っている育ちあう力を大切にして欲しい。